

瓦礫の陰で文化を守り、子を育て

松本侑壬子・ジャーナリスト

ガーダとはヒロインの名前である。パレスチナの…と言えば、いかにも“社会派”の“反戦映画”を連想しがちだが、本作にはそんな臭みはない。23歳の聡明で正義感の強い娘から、35歳の2児の母になるまでのガーダにぴったりと寄り添い12年間に撮りためた500時間分のフィルムを編集して制作したのが、このドキュメンタリーである。

毎日が戦場といったこの地から報じられるニュース映像は、戦車、火炎瓶、自爆テロ、ロケット弾、瓦礫の山…といったものばかり。けれど、もともとここは地中海の恵みを受けた緑豊かな大地に果物がたわわに実る平和な土地だったのだ。この映画には瓦礫を踏み越えて、ねばり強く力強く生きる人々の素顔が、しかととらえられている。

古居監督は、映像作品ではこれが第1作だが、フォトカメラではかなり名の知れた女性写真家である。活動の拠点はいつでもパレスチナ。初めて現地を訪れたのは1988年、40歳のときだった。

「そのとき、私に失うものは何もなかった」とふり返るように、生まれ変わった気持で未知のこの地へとやってきた。38歳のとき、原因不明の病気で歩行不能になり、あきらめかけた。が、奇跡的に回復したとき、「一度きりの人生、何かを表現したい」と、それまでの平凡なOL生活から一転、カメラに人生をかけたのである。

ガーダとの出会いは、12年前。ガザ地区の難民キャンプを取材中の古居さんの通訳となったガーダを通して、普通では不可能なパレスチナの女性の生活を内側から撮ることができた。強固な男性社会であるパレスチナでは、男女の領域が厳しく決められており、外部からは女性の生活圏に

足を入れることは至難の業だ。まして、そこで女性だけに課せられる旧弊な習慣。例えば、結婚の初夜に花嫁の処女性の証明が求められたり、伝統文化の主流である詩などの高度な文学には女性は近づけなかったり、とそういう事情に対する女性たちの気持をもカメラでとらえることができた。

古居さんのカメラは、こうした顔木をふり払い、自立への闘いを始めたガーダ自身に向けられる。婚約者との結婚を前に、古い因習に則った結婚式を拒否し、自身や婚約者の母親らの反対を押し切って2人だけでエジプトへ新婚旅行に旅立つガーダ。そんな彼女を終始支えるのは、幼なじみの夫である。海外の大学を出た彼は女性の自立を支持し、料理もうまく、不言実行。穏やかで頼もしい、ガーダの最高の味方である。不自由な生活の中で、ガーダが産んだ子どもたちが父親をはじめ一族郎党に囲まれてどんなに大切に育てられるか、には胸が熱くなるほどだ。家族の絆は、強く熱い。

ガーダは、古居監督の下で働きながら、自分の文化の継承と記録の大切さを学ぶ。1948年イスラエル建国によって故郷を奪われる前のパレスチナ人たちの生活はどうであったか。今では老人しか歌えない歌の歌詞や詩の意味は？難民第三世代であるガーダが、いま記録しておかなければ消えてなくなってしまう故郷の貴重な伝統文化、特に女性の文化 — 刺繍や話や歌など暮らしの中の文化を聞き書きしたり撮影したりし始める。その陰には、自らが「生きる意味」を求めて、一步踏み出した日本人女性、古居みずえさんがロールモデルとなっている。映画を撮るといふことの、最高の意義なのではないだろうか。



日本映画 (106分) / 古居みずえ監督

『 ガーダ — パレスチナの詩 — 』

5月中旬より全国主要都市にてロードショー

